



キルケゴールをめぐる研究方法の問題 : 日本における方法論争から

著者	平林 孝裕
雑誌名	関西学院大学キリスト教と文化研究
号	21
ページ	63-101
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028706

キルケゴールをめぐる研究方法の問題

——日本における方法論争から——

平 林 孝 裕

はじめに

1997年から2013年までの年月をかけて、新しい『セーレン・キルケゴール全集』、全28巻55冊¹が刊行された。ながく期待されていた本全集の完結は、キルケゴール研究の新時代を画するものと評価される。新版全集が企画されるまでキルケゴール研究といえば、数種の全集²によって提供された本文、そしてキルケゴー

1 *Søren Kierkegaards Skrifter*, redigeret af Niels Jørgen Cappelørn, Joakim Garff, Jette Knudsen, Johnny Kondrup, Alastair McKinnon og Finn Hauberg Mortensen, 28 bind, G·E·C Gad, 1997-2013. 本全集をデンマーク王国マルグレーテ女王に奉獻する式典がコペンハーゲン大学本館講堂を会場に、2013年5月5日、暦のうえで初夏とはいえまだ肌寒いなか挙行された。当日用意された新版全集一式は明るい色調の青のジャケットで、これに赤いテープが掛けられていた。マルグレーテ女王はこれと同色の帽子・衣服で装っていたが、その光景は一際鮮やかに列席した人々の目に映った。奉獻式に先立ち、キルケゴール生誕200年を記念する礼拝がヴォー・フルーエ教会にて、また、その翌日より三日間にわたり、Kierkegaard Reconsidered in a Global World International Congress (5月6-8日) が開催された。式典当日の様子はデンマーク王室のHPにて公開されている。<http://kongehuset.dk/menu/foto--video/festgudstjeneste-og-overdragelsesarrangement-ianledning-af-soren-kierkegaards-200-ars-fod> また、学術会議のプログラムは以下で確認することができる。https://teol.ku.dk/skc/sab/kierkegaard_200_aar/congress/ 各国からの参加者による講演・報告がなされ、キルケゴール研究の現在地が確認される貴重な機会となった。当日の様子は、現在も以下のURLにて視聴が可能である。<https://video.ku.dk/search/perform?search=International+Congress++Kierkegaard> (いずれも2020年1月14日閲覧)。

2 〔全集第一版〕*Søren Kierkegaards Samlede Værker*, udgivne af A. B. Drachmann, J. L. Heiberg og H. O. Lange, 14 Bind, Gyldendal, 1901-1914. 〔全集第二版〕*Samlede Værker*, Anden Udgave, udgivne af A. B. Drachman, J.L. Heiberg og H.O. Lange, 15 Bind, Gyldendal, 1920-36. 〔全集第三版〕*Samlede værker* i 20 bind incl. supplement Et geni i en købstad af Peter P.Rohde, Gyldendals Forlag, 1962-1964.

ルがのこした諸文書³（その大部分を『日誌』〔Journaler〕が占める）とともに読むことで進められた。新版全集はこれに対し、キルケゴールが記した文書が「刊行著作部門」「未刊行著作部門」「日誌遺稿部門」「書簡文書部門」との分類で包括的に採録された。これでキルケゴール研究のための安定した基礎が据えられたことになる。すでに英訳全集⁴は完結しているが、遺稿集に関してはその抜粋が刊行されるにとどまっていた⁵。しかしながら、デンマーク語原典に基づいて、遺稿集の新しい英訳が精力的に進められており、将来における完結が期待されている⁶。デンマーク語原典はもちろん、また幅広い読者にとって参照が可能な英訳が用意されることによって今後、刷新されたキルケゴール像を結ぶ可能性が期待される。

以上述べたような現状に鑑みて、あらためて「キルケゴールを読む」ことはどのような営みなのかを問うことは十分に意味あることだと考える。この企図を果たすには、キルケゴール研究をめぐる原理的な考察から始めることもできようし、また、数多くの研究文献を渉獵し、傾向と課題を分析することも必要であろう⁷。その場合、原理的な考察であれば、広く知られているキルケゴール

3 〔遺稿集第一版〕*Af Søren Kierkegaards Efterladte Papirer*, udg. af H. P. Barfod og H. Gottsched, Bd I-IX, Kbh. C. A. Reitzel, 1869-1881. 〔日誌遺稿集第二版〕*Søren Kierkegaards Papirer*, udg. af P. A. Heiberg, V. Kuhr og E. Torsting, bd. I-XI, Kbh. 1909-1948; 〔第二版増補版〕*Anden forøgede udg. ved Niels Thulstrup*, bd. I-XVI, Kbh. Gyldendal, 1968-1978 (Index til *Søren Kierkegaards Papirer*, ved Niels Jørgen Cappelørn, bd. XIV-XIV, 1975-1978) また、これにくわえて手紙と文書が参照される。*Breve og Aktstykker vedrørende Søren Kierkegaard*, udg. af Niels Thulstrup, bd. I-II, Kbh. Munksgaard, 1953-1954.

4 *Kierkegaard's Writings*, edited by Howard V. Hong and Edna H. Hong, Princeton University Press, 26 vols., 1980-2000.

5 *Søren Kierkegaard's Journals and Papers*, edited and translated by Howard V. and Edna H. Hong, 7 volumes, Indiana University Press, 1967-1979.

6 *Kierkegaard's Journals and Notebooks*, edited by Niels Jørgen Cappelørn, Alastair Hannay, David Kangas, Bruce Kirmmse, George Pattison, Vanessa Rumble, and K. Brian Söderquist, 11 volumes, Princeton University Press, 2007-2019. 以下、継続中。

7 1990年から2012年までの日本のキルケゴール研究の概観は、“Kierkegaard Studies in Asia”としてパネル発表で公開している。現在も映像として以下で視聴可能である。<https://video.ku.dk/panel-presentations-ii-international> (52分から72分: 2020年1月14日閲覧) 本パネル発表については、アジア圏、少なくとも東アジア圏の研究動向の報告が期待

のいわゆる「仮名」使用及びそれに関する自著解説の問題を避けることはできない。また、長い伝統を積み重ねている日本における研究史を概観するだけで多くの紙幅を費やすことになる。そこで、本稿では第三の道をとりたいと願う。

これまで日本ではキルケゴール研究をめぐる方法論争が行われたことがある。日本における方法論争は、二回にわたって展開された。第一回の論争は、小川圭治氏と梶田啓三郎氏との間に行われた。また第二回は、小川氏と橋本淳氏との間に行われた。この二つの論争で問題となった点を整理すれば、「主体的解釈」と「歴史的研究」との相克であり、それぞれの研究の有効範囲をめぐる反省であった。これらの論争が日本におけるキルケゴール研究の方向を決定付けるほど大きなイムパクトを与えなかったことは残念なことであるが、少なくともキルケゴールを研究することをめぐる真摯な反省が日本においてもなされていたことを今日想起すべきであろう。さらにこれら論争に直接応答したわけではないが、大谷愛人氏の問題提起にも触れねばならない（以下の論述においては敬称を割愛するがご理解を願う）。また、これらの論争の背景には、デンマークで顕在化したキルケゴール研究の原理的問題が関係している。以下、明らかになるように、上記の論争はキルケゴール研究が置かれている現在地を反省するために求められる材料を提供している。あわせて、この議論の範囲で、仮名の問題も言及され、また研究史的な回顧もある程度なされることになる。

以下、日本とデンマークにおける研究方法論をめぐる議論を回顧することによって、「キルケゴールを読む」ことの課題を闡明したいと考える。

1. 主体的解釈と文献研究 小川－梶田論争

この論争は、1964年3月に発表された小川の論文「キルケゴール解釈の諸問題」（のちに『主体と超越』に再録⁸⁾）に対して梶田が1965年に「キルケゴール研究の意義と方法―ひとつの弁明―」をもって反論したことをいう。小川は後に

されていたのではと考えるが、本発表冒頭で断ったように、筆者の制約から日本における近年の研究動向の紹介にとどまっている。ご寛恕を願う次第である。

8 小川圭治『主体と超越』（創文社、1975）、89-118頁。

『主体と超越—キルケゴールからバルトへ—』で簡潔に応答している⁹。論争は、二十世紀最大の神学者の一人であるK・バルトに学んだ小川氏が同じくバルト派のディームのとった「実存弁証法的解釈」の立場からヒルシュに代表される文献的・歴史的研究の弱点を指摘したのに対して、梶田は人間キルケゴールをみるという立場から実存弁証法的な解釈の前提となる基礎研究としてのヒルシュのような研究の不可欠を弁明し、さらに歴史的研究を欠いた主体的研究の不毛を暗に批判している。

小川が論文の出発点とするディームは次のようにキルケゴール研究における課題を提起した。

キルケゴールの著作が、そんな概観しにくく、方法論的にも困難を伴うのは、何よりもまず、偽名¹⁰による間接的伝達からくるむずかしさ、つまり偽名の著者が述べていることの背後にキルケゴールじしんの見解を見出すという課題がほとんど解決不可能だということによるのではない。もっとも歴史的、心理学的関心の方がまさっている研究は、まさにこの課題を解決しようと努力している。だがこの課題を歴史的研究という手段を用いて徹底的にとくことができたところで、キルケゴールの著作の理解ということのためには、本質的には何ひとつしたことはないであろう。キルケゴールは、その著作活動の形式においても、その個人的な生き方においても、その人間Personを作品の背後にしりぞかせて、他の人々にとっては、彼の人間はどうでもよいものになってしまうほどの、極端なまでの努力をした。(小川 1964: 46 [Diem, 1928: 140])

したがって、歴史的キルケゴール像は読者にとって主要な問題でない、とも言い切っている。

9 小川圭治「付論 梶田啓三郎氏の批判について」『主体と超越—キルケゴールからバルトへ—』(創文社, 1975), 119-124頁。

10 「偽名」とある部分は、のちに『主体と超越』において「仮名」と改められている。

ディームの批判は、キルケゴールそのひとを彼の著作に読み取ろうとする、または読み取することを目的とした「心理学的」ないしは「歴史的研究」の不毛を指摘することを目的とする。なぜならキルケゴールは「ソクラテス的な仕方での作品の背後に消え去ろう」（小川 1964: 46）とするのだから、歴史的研究のように直接的に作品の中にキルケゴールを発見しようとする歴史的研究は失敗に終るからである。

こういったディームの立場から小川は歴史的研究の限界を確認しようとする。ここで歴史的研究として俎上に挙げられるのは、ガイスマーならびにヒルシュの研究である。ガイスマーは「キルケゴールにおける倫理的段階」（1923-24）¹¹ならびに大著『セーレン・キルケゴール—その人生の発展と著作家としての活動—』（1926-28）¹²においてデンマーク人である利を生かして「歴史的な基礎研究」を用いて、「キルケゴールの思想をその生涯の発展に即してあとづけよう」とした（小川 1964: 51）。しかしディームからすれば、「キルケゴールの人間からその作品を解明しようとするという方法」（小川 1964: 51 [Diem 1928: 161ff.]) によって、著作にある困難を回避可能だと考えることは誤りである。同様な理由から、ドイツのキルケゴール研究者エマニュエル・ヒルシュも批判される。ガイスマーの方向に従ってヒルシュは著作のみならず膨大な日誌遺稿をも利用して歴史的な研究をすすめ、浩瀚かつ精緻な『キルケゴール研究』（1930-33）¹³を著した。しかしながら、「ヒルシュの研究では、実存的対決という面が、歴史的厳密さという一種の眺める態度に埋没して行くことは否めない」と小川はディームの立場からその問題点を指摘する（小川 1964: 52）。

歴史的研究に対して、ディームの方法は「キルケゴールの方法を、彼の方法を用いて叙述する」（小川 1964: 48）ことであるという。キルケゴールの方法こ

11 Eduard Geismar, "Das ethische Stadium bei Søren Kierkegaard," *Zeitschrift für Systematische Theologie*, vol. 1, 1923-24, pp. 227-300.

12 Eduard Geismar, *Søren Kierkegaard: hans Livsudvikling og Forfattervirksomhed*, Kbh: Gad, 1926-1928.

13 Emanuel Hirsch, *Kierkegaard-Studien*, Bd. I-II. Gütersloh, 1930-1933 (repr. Vaduz: Topos-Verlag 1978).

そが「実存弁証法」である。実存弁証法は、ソクラテスの方法にならって「対話者を自由な主体として解放し、自己の実存的内面性へと還帰せしめ」（小川 1964: 46）、「その実存において一定の態度決定をなさしめ、それを弁証法的に確立させるようにしむける」（小川 1964: 47 [Diem 1928: 144-45]）。彼の著作を読むということは弁証法的に組織された「円環」にはいることなのである。キルケゴールは著作において終始こういった「方法論的原理」をつらぬいたのであり、それゆえ読者は「弁証法的対話の中で形成される実存のカテゴリーとかかわり、それを通じて間接的にキルケゴールの人間にかかわりをもつ」（小川 1964: 47）ことができる。眼目は、実存弁証法において遂行される「実存的関係」または「弁証法的対話」が確立されることであって、その限りで「歴史的研究が問題とされる」。これと同じ理由でいわゆる体系的研究をもディームは拒否する。キルケゴールは「実存弁証法」という方法をもっていただけであり、「その円環を一つの直線に引きのばしキルケゴールの思想 *Anschauung* を体系的に叙述しようとするあらゆる試みは、すでにその出発点において誤っている」というわけである（小川 1964: 47 [Diem 1928: 145] 傍点は小川による）。ディームに従えば、研究における一貫性は、著作に展開された思想の体系性ではなく、全著作を通じて使用されている実存弁証法の方法の一貫性にのみもとめられる。こういった立場からディームは『キルケゴールにおける哲学とキリスト教』（1929）¹⁴を著した。この態度は『キルケゴールの実存弁証法』（1950）¹⁵に到っても一貫していると小川は評価している。

小川はこの議論を踏まえて次のように総括する（小川 1964: 58-59）。一方歴史的研究は、その客観性の要求にも拘らず、思弁的解釈を方法論自覚なしに併用して実存的対話から遠ざかってしまった。また他方、日本における主体的解釈による研究では、方法論裏付けがないため、恣意的、主観的という歴史的研究からの批判に耐えることができず、それ自体としても非徹底なものとなってしまう

14 Hermann Diem, *Philosophie und Christentum bei Søren Kierkegaard*, München: Kaiser Verlag, 1929.

15 Hermann Diem, *Die Existenzdialektik von Søren Kierkegaard*, Zollikon-Zürich: Evangelischer Verlag, 1950.

た。このような両面の弱点に対して、実存的対話による研究方法を方法論的に裏付け、さらにそれを徹底させることが必要であると云う。

ディームの実存弁証法の理解が唯一可能な解釈ではないと断りつつも、小川は「みずからひとりの人間として、キルケゴール自身と真剣な対話を試み、自己の実存の深い自覚に達することを目標とする」方法は「実存弁証法的解釈の方法」にほかならない（小川 1970: 117 [小川1964: 58]）¹⁶。

梶田は文献学・歴史的研究の立場から、小川の主体的、実存弁証法的な解釈方法に対して反論を展開した。梶田は「実存」を「人間のある特殊な「生き方」の意味に、「弁証法」を「問いと答えの交代」による「対話」と規定し、つまり実存弁証法的キルケゴール研究とは「キルケゴールと対話しながらキリスト者としての生き方を自分のものとして」ゆくことであるとされる（梶田 1965: 3-4）。しかし、梶田によれば、「対話するには、正しく対話するためには、何よりもまず語りかけてくれる相手の言葉を正確に聴きとらねばならない」のであって、「私たちの研究方法に関する一つの重要な問題は、まさにここにある」と指摘する（梶田 1965: 4）。すなわち翻訳における誤訳、意味不明で勝手な意識にみられる研究者における無理解である。キルケゴールは「たいへんに読みにくい思想家」（梶田 1965: 6）であると梶田も告白しつつ、その困難が二つの点に原因するという。まず「複雑きわまりない偽名使用の秘密」に代表される「間接的伝達」という表現形式があり、また「一見しごく客観的なように見える所論にも、キルケゴールの個人的な体験がかくされていて、その所論の裏づけをなしており、しかもこの個人的な体験と見られる根本的なものが、それ自身まったく謎にまつまれた究めがたい秘密に属しているからである」（梶田 1965: 7）。梶田は、この理由からデンマークでは古くからキルケゴールの体験の秘密を明かそうとする努力が続けられてきたのであり、彼の著作には個人的な体験が不可欠な要素として組み込まれている場合も少なくないのだから、これを無視して彼の秘密にふれる暗いところを避け、理解可能な箇所をつなげただけでは「実存弁証法」

16 この箇所は『主体と超越』に採録される際、若干書き改められている。新しい本文が趣旨が明瞭であるので、書き換えられた本文を採用した。

的な対話など成立してはいないのだと批判する。むしろガイスマー並びにヒルシュの行った「キルケゴールの著作を生活から理解しようとする試み、あるいは生活の発展に即して著作を理解しようとする試み」を梶田は高く評価する（梶田 1965: 8）。むしろ先述のディームの考えは梶田の立場からすれば全くの独断でしかない。

「その人間がどうしてもよいものになってしまうほどの、極端な努力をした」のだったら、キルケゴールは、明らかに死後の出版を予想して書かれた、あのぼうだいな日記など、残しはしなかったであろう。著作の背後に人間キルケゴールを感じないとしたら、人間キルケゴールはどこにいるのか。（中略）著作のなかに一人の作者をではなく、一個の人間を見いだすからこそ、私たちは魅せられるのではないのか。思想と思想家は別なのか。（中略）もしディームのいうように「歴史的なキルケゴール像」ぬきの「実存弁証法」だけにキルケゴールの本質的なものがあるのだとしたら、私なら、キルケゴールを読むことをやめて、むしろ聖書につくだろう。（梶田 1965: 9）

キルケゴール研究における「日誌遺稿」（梶田は「日記」と称する）の意義に言及しつつ、「実存弁証法」だけに固定してしまう方法が、著作にある対話者としてのキルケゴールをむしろ取り逃がしてしまう危険を梶田は指摘するのである。

梶田には、キルケゴール研究における「実存弁証法的方法」が一人歩きをしているように思われた。「思想内容を離れて方法はなく、その方法を、ほかにしては思想のみずからをあらわす方法がない」（梶田 1965: 13）のであって、「キルケゴールみずからがみずからにおいて示すとおり、キルケゴールを捉える」（梶田 1965: 14）ことは当然である。しかし、梶田によれば、個々の研究者は「自分の方法が最も正しいと信じて、目標を目ざし、そこへ通じている道に従って自己の道を進んでいる」のだから、その妥当性を判断することは容易でない。これを公平に判断するには、「ものは多くの側から見られうるもので、しかもそのどの

見方もそれぞれの側から見ればたいていは正しいもの」なのだから、自分の見方からただ批判するのではなく相手の見方になつて、それが真実を映すか否かを自分でみるべきだという。それでも解決できぬなら、「その論争の決定はこれを歴史の審判に委ねて、めいめいわが道を行くことだ」と断じている（梶田 1965: 14）。

ディームの、キルケゴール・ルネサンスは一つの伝説であり、事実において今日キルケゴールは全く読まれていない、との評言を梶田も認める（梶田 1965: 16）。それはキルケゴールが安易な繙読を不可能とする困難をもつからであり、それゆえにこそ「私たちの研究は、読者がキルケゴールとそのような対話をされるための手段を供して、その手助けをしたい」と述べる。さらに続けて「私たちも、もちろんキルケゴールとの実存的な対話を怠ったり忘れていたりしているわけではない。むしろ、絶えずその努力をしながら、一見それを忘れたかに見られがちな歴史的研究にたずさわっているだけなのである」と自己の立場について述べている（梶田 1965: 17）。

小川が主張するところの実存弁証法的な円環に入り込むためには、まず著作に関する正しい理解が必要である、というのが梶田の反論である。キルケゴールをめぐるさまざまな秘密について一定水準以上の理解を持たなければ、そもそも著作の理解そのものが不可能である。理解出来ないところを適当に埋めて、悪く言えば誤魔化して読むとすれば、梶田が正当に指摘するように、主体的な理解どころではないだろう。確かに誤解も一つの理解であるとはいえ、自ずとそれにも限度があるに違いない。キルケゴールの設定した円環があるとすれば、彼はただ読者をこの罨へと落とし込むことだけを目的としたのではなく、その罨によって何事かを伝えようとしていたに違いないからである。言い換えれば、なぜこのような円環が設定されたのかが問題となろう。この「なぜ」が問われるとすれば、そこに著者の意図が想定されざるをえないし、著者の意図を正しく理解するためには、著作に対する正しい注釈が要求される。この点で梶田の反論は正当である。

小川－梶田論争を総括するならば、主体的解釈と歴史的研究がいかなる関係

を持ちうるか、が主題化されているといえる。小川に従えば、まず主体的研究であり、歴史的研究はこれに奉仕するものであり、梶田に従えば、歴史的研究が達成されたうえで初めて主体的解釈が成立するといえる。はたしてどちらが先行すべきなのか。

この間が単純でないのは、実際は単にどちらが先行するのか、といった問題ではないからである。単純に著作に対する主体的関わりと客観的な歴史的研究との関係であれば、これは結局循環でしかない。キルケゴールの著作を読み始めることは主体的関わりではあるけれども、それが本当にキルケゴールに触れているといわれるには歴史的精査が要求され、それは再び主体的な読解へと展開しなければならないからである。しかしながらこの論争で小川は単に主体的な関わりが必須だといったのではなく、方法論として「実存弁証法的方法」をとるべきであり、これによってキルケゴール特有の困難を回避しようと主張するのである。それゆえに実存弁証法的でない、ただ客観的な歴史的研究はこの方法論的な自覚を欠くゆえに非難される。後の小川の再応答で明確に述べられるように「思想と思想家との区別」（小川 1975: 123）がここで重要となる。梶田の発言のように「思想と思想家とは別なのか」（梶田 1965: 9）という問いかけは、「この二つが、なんのずれもなく直接結びつくということが無造作に前提されて」（小川 1975: 123）いることを示す。歴史的研究がこういった前提に立っているとすれば、仮名著作に隠されているダイナミズムにふれることはできずキルケゴールの著作における困難を解き得ないということである。というのも、歴史的方法がキルケゴールをとりまくさまざまな個人的な事情や心理的な状況を明るみに出し、この意味で仮名をめぐる問題の接近に奉仕するにしても、結局仮名とキルケゴールその人の間隙を埋めることができないからである。小川のいう実存弁証法的研究方法は、著作に設定された円環に主体的に関わることによってこの困難を回避するための方法論である。この射程においては梶田の批判はあたっていない。実存弁証法的方法は、キルケゴールが著作に設定した思想を対象にし、思想家キルケゴールに間接に関わることしか求めないからである。

梶田の反論も正当な部分がある点も注意すべきである。デュームー小川は著

作に設定されている構造が実存弁証法であるとしたが、それがキルケゴールの著作から見出されたものである以上、「実存弁証法」に限っては思想家キルケゴールの思想として直截に読み取ったことになる。この読解が可能であるためには、梶田のいうとおり、客観的歴史的精査が必要である。これなしに単に「実存弁証法的方法」が彼の方法だと主張するとすれば、「レディ・メイド」な研究方法で「論敵を片っぴしからなでぎり」（梶田 1965: 13）していると批判されても当然である。

この論争は必ずしも実り多いものではなかった。それは主体的関わりと客観的歴史的研究という図式的な対立であるかのようにみえることによって、肝腎な問題を覆い隠してしまったからである。つまり、この論争の本質は、思想と思想家との関係を、仮名使用をふくむキルケゴール特有の著作活動という困難に直面して、いかに理解するかという問題である。梶田の方向は、歴史的研究が思想家＝思想の図式を前提していることを意図せずして明らかにした。小川の論点はここにあったのであり、ディームの方向は思想と思想家の乖離を前提として、それを「実存弁証法」で間接的に架橋しようとするものであった。この論争が示唆すべきものは、「思想と思想家との差異」という解釈上の原則なのであった。

2. 大谷愛人による問題提起——デンマーク語から見た研究——

1966年に日本のキルケゴール研究史において画期的な研究書が著された。大谷愛人『キルケゴール青年時代の研究』である。正編に続いて続編が二年後に出版されるが、両編あわせて1600頁を越えるこの研究は、デンマークの思想史ならびに文学史の領域に関する膨大な資料を駆使して、これまで断片的にしか伝えられなかったキルケゴールの青年時代とそれを育んだ背景を描き出した。

本書が重要である理由は、あまり知られていなかったキルケゴール思想の背景を明らかにしたという功績にあるが、看過し得ないことは、大谷がこの研究をはっきりとした方法論的な自覚をもっておこなった点である。それはドイツ語における研究がキルケゴール像を一面的なものにしてきていること、ドイツ語文献に主に依拠した日本の研究がその歪みをもそのまま映していることを指摘し、

それゆえにデンマーク語（また北欧語）文献に依拠すべきだと大谷は主張した。大谷の主張は、別の視点から小川－梶田論争を取り上げるものである。すなわち、主体的解釈が立つという実存弁証法がキルケゴールの思想の中核としうるか、という問いを大谷は再燃させるからである。

大谷は、日本の研究史を回顧して「基礎的研究」と呼べる文献があまりに少ないという。「キルケゴールは何よりもまず「デンマーク人」であるから、キルケゴール研究のため方法の最低条件として、(1) デンマーク語文献に依拠すること、(2) 彼をとり巻くデンマークの歴史事情に忠実であること、この二つに、何はともあれ基かねばならない」はずだが、この最低条件を充たす日本語文献はほとんどないと断ずる（大谷 1966: 5）。日本の研究は、「キルケゴールがデンマーク人である」という「基礎的な一事」を無視して、「ドイツ語文献に依存しきっており、自分たちのキルケゴール研究が、結局は、ドイツ哲学、ドイツ神学、ドイツ文学というジャンルの中で行われていることに気づかなかった」と批判する（大谷 1966: 6-7）。大谷もキルケゴールの思想を世界へ普及させるにあたってドイツ語文献が果たした役割を積極的に評価する。しかしそれはドイツ語文献の研究としての価値とは区別されるべきだと言うのが大谷の主張である。

ドイツ語文献に内在する問題を明らかにするために、大谷は、小川－梶田論争と同様、ディームとヒルシュとの間の方法論的な対立を引証する（大谷 1966: 10-12）。ディームについては大谷も先の紹介と同じようなまとめをするので、ここでは繰り返さない。そして、ヒルシュの立場からディームを含めたドイツの研究が批判される。大谷は、ヒルシュに従ってドイツのキルケゴール研究は「根本的な病い」に罹っているという。「キルケゴールの思想を生涯の客観的史実に基かず、強引に気儘に、一つ概念や図式の中に、キルケゴールを容赦なく閉じ込めて行く」という病である（大谷 1966: 12）。それは「キルケゴールを育んだ歴史的状況、即ち彼の生きた十九世紀前半世紀のデンマークの特殊事情というものを殆んど無視している」（大谷 1966: 20）。ヒルシュはこれに対する反省から「歴史的研究法」に従って「誠実に忠実に、キルケゴールの客観的事実を研究して行く方法をとる」と大谷はいう（大谷 1966: 12）。ヒルシュの方法は、そ

のためにキルケゴールを「未だ知られざるX」として前に立て「それを知るための条件をつつましく整えて行く」のであり、「あくまで、無限なる視点の中のほんの一つの視点とする位置をとり」、ドイツ語文献の共通の欠陥であるキルケゴールを「既知ってしまった像」として手もとにかかえ、それを説明して行く態度」を避ける（大谷 1966: 16）。このヒルシュ＝大谷の視点からはディーム＝小川の「実存弁証法」立場は「公式主義」（大谷 1966: 15）であり、キルケゴールの思想の一部にすぎない「弁証法」＝「キルケゴール」と規定することである。大谷によれば、われわれの研究課題とはこういった公式主義に陥ることなく、「基礎的な研究方法」によってキルケゴールを「知るための条件をととのえる作業」なのである（大谷 1966: 16）。

しかし大谷が「基礎的研究法」と呼ぶものは単にヒルシュの方法ではない。ヒルシュの方法をさらに徹底したものである。ヒルシュは、ドイツの研究より北欧の研究を薦めた。大谷は、北欧文献が重要視されねばならない理由は、「キルケゴールの思想というものが、外国人には仲々理解の行かないデンマークの特殊事情」に強く影響を受けているためである（大谷 1966: 21）、という。大谷が依拠しようとする北欧の諸研究も「伝記的研究法」と「思想的研究法」に分けられる（大谷 1966: 26）。「伝記的方法」は、「キルケゴールの作品は、余りにも秘密に充ち、余りにも不明な部分が多すぎるので、そのままでは到底読むことが出来ない」ので、「それらの秘密と不明の部分は、いずれもキルケゴールの人間性と生活それ自体の節々に関係がある」と考え、「生涯」の秘密」を解明することで作品の理解に役立たせようとしたことに始まる（大谷 1966: 26-27）。

伝記的方法是、その秘密をキルケゴールの「憂鬱」にあると考え、それを「内面史」的として心理学的方法で捉えようとした「内面－心理学的方法」と「外的な人間関係、社会関係、時代との関係」に焦点をあて、「それらが内面史の過程に大きくひびいているという観点から、それら外的な関係を誠実に記述する」「外的－社会史的方法」に区分される（大谷 1966: 29）。北欧の研究における「思想的方法」の特徴は「歴史的」「文献学的実証的」研究が多く、「解釈や理論構成を主眼としたものは少ない」（大谷 1966: 31）。大谷は、これら北欧での諸研究の

動向を概観した結論として、これらの諸研究の方法は異なった対象を扱っているようであるが、キルケゴールの思想を成り立たせる「三つの条件」（「内面的－心理的条件」「時代的－社会的条件」「思想史的条件」）をそれぞれに即して明らかにしたにすぎないという。それらは「各々の研究した各条件、或は側面に関する限りの成果」を提示するのであって、これらはさらにキルケゴールの思想全体として「総合」される必要があることになる（大谷 1966: 32）。ここで決定的であるのが、北欧の研究方法に共通する要素としての「[資料]による実証的方法」である。大谷は方法の流れに従って「個人的－心理的体験に関する資料」「時代、社会及び対人関係に関する資料」「神学その他の学問研究」の資料をキルケゴールの思想の「形成過程」に従って提示し、証拠立てるという方法をとるといふ（大谷 1966: 33）。そのことによって「[キルケゴール]についての気儘な「解釈」を排し、今まで日本の研究者も読者も一度も触れたことのない「歴史的キルケゴール像」に、できるだけ近づくための条件を整えるという「基礎作業」をする」ことを一切の目的とすると結論付けている（大谷 1966: 36）。

「キルケゴールがデンマーク人である」ということが日本の研究においてどれだけ考慮されているか、という大谷の批判はまさしく正当であり、その批判は今日でも妥当するかもしれない。この点は前節で指摘したように、ドイツ語文献から主としてキルケゴールの思想を受け入れ、「実存思想」の移植とともに、キルケゴール像を固定してしまった日本の研究の決定的な欠如である。デンマーク語という必ずしも支配的でない言語で書かれた研究は広く知られるのは困難であることは割り引くにせよ、あまりに関心であった点は疑いえない事実である。この意味で、大谷がいう彼の思想を構成する「三つの条件」を欠いた研究は、解釈の遊びに陥る危険がある。大谷の北欧文献しか有効でないとさせる主張がいい過ぎた点もあるにせよ（少なくともヒルシュのドイツ語の研究は認めている）、キルケゴールがデンマーク人であり、彼はデンマーク語で思考し著作したのであり、その限りでデンマークの事情が考慮されなければならないという指摘は真摯に受け止められるべきである。また、歴史的な探求を為すにあって、十九世紀デンマークの事情に関する資料（一般的な歴史、教会史、文学史、

哲学史、言語学史、思想史など)の重要性を強調する(大谷 1966: 36)と同時に、「日記・書簡・文書類」と称して『日誌遺稿集』等や『系図』『蔵書目録』を基礎資料に研究を進めている(大谷 1966: 37-40)。

梶田が歴史的研究方法を「思想」＝「思想家」として擁護したよりも、ディームを批判する大谷の主張は説得力をもつ。というのも、大谷の主張は、単にキルケゴールの思想が著作にそのまま現れているとするのではなく、彼が著作を書くということそのものが彼の取り巻かれるデンマークの事情に制限され、条件付けられているとの意見として理解されなければならないからである。キルケゴールは十九世紀前半のデンマーク語で書き、その当時の読者にむけて著作を送り出した。「実存弁証法」的であるとはいえ、キルケゴールの著作が当時と同様に現代へと向けられているという権利はどこにあるのだろうか。主体的解釈はこのアポリアを逃れ得ない。大谷は「[資料]」を浮き上がった「解釈学的方法」とこれを非難し、「[資料]」による実証的方法」とこれにもとづいた「総合」を訴えた(大谷 1966: 32-33)。大谷の問題提起は、キルケゴール研究が、著作のみならず「日誌遺稿」をふくむキルケゴールのテキスト及びデンマーク語及び北欧語文献を十分に顧慮しながら行われるべきであるとの重大な成果をのこしたといえる。

3. 「歴史的研究方法」と主体的解釈 橋本－小川論争

大谷の問題提起はキルケゴールを「十九世紀デンマークでデンマーク語で執筆した思想家」として扱う重要性を研究者に示唆したが、この主張がさらに方法論として先鋭化されて「主体的解釈」に突きつけられたのが、橋本－小川論争である。橋本淳は1976年に『キルケゴールにおける「苦悩」の世界』を著した。本書で採用した「歴史的方法」に対して、その書評論文(1979年)で小川が「実存弁証法」的立場から批判した。この論争は、さらに対談という形で両者が対決する事によってその問題点が深められ、翌年、小川が再び実存弁証法的方法からの方法論を「キルケゴール研究の方法について」で改めて提示するという経緯をへた。この論争では、すでに大谷によって先取りされているが、

キルケゴール研究の諸成果をいかに総合することができるかが問題となった。橋本が、そのためにツルストルプの「歴史的方法」を採用し、小川は実存弁証法的研究方法を継承しつつ、マランツクの方角へと展開しようとした。

橋本は、まず日本のキルケゴール研究史を回顧して、それが「実存主義および弁証法神学の流入にともなって一般化し」た結果、「ここで定着したキェルケゴール像は、実存主義もしくは弁証法神学を通ずる片影であって、全体としてのキルケゴールではあり得なかったし、そのように部分的なキェルケゴール理解を反省してキェルケゴールそのものへと迫る必然性が、痛感されもしなかった」（橋本 1976: 33）とその問題点を挙げる。それによる不当な図式化によって、キルケゴールの全体像を見失ってしまったと批判する。その理由は、これまでの研究が研究文献ならびに翻訳においてあまりにドイツ語に依存していた点に「最大の原因」があると橋本は指摘する。それに加えて、これは和辻の研究を念頭においていると思われるが、「日本におけるキリスト教の伝統は乏しく、キリスト教会の力そのものが微弱なため」キルケゴールの思想に本質的な「キリスト教的要素の理解」が不徹底となり、結果「キリスト教的なものは一般宗教的なものへと普遍化されて」「副次的な関心」としかならなかった（橋本 1976: 34）。

三土興三・橋本鑑・原田信夫の研究に共感しつつ、主体的な取り組み方がキルケゴール理解において必須であることを、橋本も確認する（橋本 1976: 34）。とはいえ、そのためには「対象を客観的に見据え、一つの明確な方法論的自覚に立って、それなりの学問的操作が加えられなければなら」ない。この自覚を欠けば、それは「自己の思想的立場の単なる延長」ないしはある前理解にもとづく「身勝手なキェルケゴールの思想分析や組織化」でしかない。主体的な対話へと深まるために「基礎研究として、歴史的客観的な研究が何においても欠くわけにはいかない」と橋本は主張する。この視点から従来の研究の問題点を次のようにまとめる（橋本 1976: 35-36）。

- (1) キェルケゴールに関する客観的な歴史的研究が不徹底であったこと
- (2) キェルケゴールに関するデンマーク語資料の検討が不十分であったこと、

むしろ殆んど顧慮されなかったこと

- (3) かくして例えば、仮名著作問題などキルケゴールの著作活動の意図、方法を理解しつつ、遺稿集をも含めて著作活動全体からの総合的な把握に欠けていたこと、
- (4) 中でもキルケゴールにおける宗教性、就中、キリスト教的なものの根源的にして全体的な把握を欠いていたこと

これを要約すれば、キルケゴールが「デンマークのキリスト教的思想家」であるとの「単純な一事」を看過したことでありという（橋本 1976: 36）。この論点の多くは、すでに大谷が日本の研究の問題として指摘していたことであった。

以上で指摘された問題を克服するために、橋本は、日誌遺稿（「遺稿集」と呼ばれる）をふくめた著作活動全体を顧慮すること、ドイツ語文献の依存から脱却しデンマークを中心とする北欧の文献を重要視することを要請する。橋本は北欧のキルケゴール研究の概観からそこに含まれる問題点を反省して、キルケゴール研究に顧慮されるべき点として次のものをあげる。方法の曖昧さから伝記的・心理学的研究に見られがちな末梢的なキルケゴール像に走らないために、「全体としてのキルケゴール像を把らえ得る視座を確保できる明確な方法を」もつこと、「**哲学的・神学的研究が先行**」すべきこと、そのために「**伝記的および精神的背景を顧慮する歴史的客観的な作業が基礎に**」置かれるべきこと、「**著作活動全体**（公刊諸著作のみならず、遺稿集、手紙などを含めて）**に対する総合的視野からの把握**」が必要であることが指摘される。このような全体的把握は研究者の個人的関心から恣意的に行われてはならないから、「キルケゴール資料もしくはその研究文献に対する**基礎的な、歴史的な前研究**」が不可欠であり、とくにキルケゴールの他の思想に対する解釈は必ずしも一般的な理解とは一致しないため「著作の正しい理解のためには、各語句および用語、概念または引用語句などに対する厳密な**学問的な釈義**が望まれてくる」（橋本 1976: 54-56）。

このような要求を充たす研究方法として橋本はツルストルプ（橋本の表記は「トゥルストルプ」）の「歴史的方法」が十分に顧慮されるべきであるという。

橋本によれば、「セーレン・キェルケゴールもまた時代の子であり、その作品が数多の糸によって同時代と結びあっていることは、自明である」から、「彼の用語、語句の選択、立論構成の方法、引用語句、或いは彼の作品やその議論が仮想している対立的な時代の思想傾向とか運動もしくは人物、—これらすべてが消極的にしても積極的にしても彼の時代によって枠づけられている」。この「錯綜した糸」をときほぐすことがキェルケゴール研究にとって先ず課題となるのであって、そのためにツルストルプの「歴史的方法」がもっとも重要なのである（橋本 1976: 69）。ツルストルプの方法とは「精神史的背景さらには彼自身の伝記的背景を顧慮しつつ、同時にセーレン・キェルケゴール自身の著作活動全体の性格、方法、目標に即応して個々のテキスト、語句、概念等の分析」を試みる方法である（橋本 1976: 70）。ここで橋本が注意する点は、確かに研究は個々の作品の分析から著作活動全体への総合、さらに総合から分析へと循環するものではあるが、それが「不正確で一面的」なものにならないために「分析が総合に先行しなければならない」（橋本 1976: 70-71 [Thulstrup 1955b: 371]）と断言している。この客観的・歴史的な分析の基礎に立って総合的理解が可能になる。この際に手がかりとなるのが、キェルケゴールにおける「不動の要素」、新約聖書の真理とこの真理に面して決断を迫られる人間への洞察、と「遊動する要素」、著作の書かれた具体的状況、思想家としての発展、とを区別することである（橋本 1976: 71 [Thulstrup 1955c: 318]）。これらの諸要素をつねに顧慮しながら、「歴史的な基礎研究に続いて、個々のものを総合的に組織化する総合的組織的作業がなされ、かくて最後に」キェルケゴールに対する「批判をもった評価」が可能になると橋本は主張する（橋本 1976: 72）。

「歴史的方法」の具体的な道筋として次の点が挙げられる。まず翻訳は一つの解釈であるので「直接に」デンマーク語原典に向かうこと、とりわけ著作に加えて遺稿集を顧慮すべきこと、「客観的な歴史的研究による学問的作業が前提とされる」こと、このためにはキェルケゴールが「何を読み、知っていたかが理解される」ことが大きく役立ち、そのために「蔵書目録」が利用されること、この作業の結果、彼の「思想の中核を形作ると思われるテキスト群が選別され、

ここから醸成されてくる思想をもってこれを総合的に組織化する」こと、その際特に彼の「キリスト教的思想家としての体質が、十分顧慮されねばならない」こと、である。最終的に「キルケゴールを読み研究することは、キルケゴールの思想を一つの体系へと構築することではなく、また、客観的な知識の提示につきない、むしろキルケゴールの生涯と思想が指示する問題との実存的対話を通じて、何よりもまず自己自身の内面へと深まり、究極には彼の生と思想が証しする「真理」との実存的対話、さらには対決へと赴かねばならない」と橋本は主張する（橋本1976: 74-76）。

ツルストルプ＝橋本の「歴史的方法」は、ディームが批判した歴史的研究とは異なって、明確な方法論的な意識に貫かれている。思想的研究を中心に据え、総合的理解を目指すという仕方で、伝記的、心理的な研究にありがちであった末梢に走る危険を反省し、回避する方法を考えている。しかも大谷によって問題提起された歴史性の問題を、テキストの歴史性の問題としてはっきりとさせたといえる。

小川は『苦悩の世界』を三年後『日本の神学』誌上で書評する。本書を小川は「たんにデンマーク語をよく読める著者が、キルケゴールの原典と北欧における多くの文献を読破し、それをくわしく紹介したというだけにとどまらず、一つのユニークな視点を提起し、そこから問題を内容的にも深く理解しつつ論述を展開した点で、キルケゴール研究の新しい段階を切り開いたもの」（小川1979: 155）と高く評価している。このような高い評価を与えながらも小川は、橋本の方法論に本質的な疑義を投げかけている。実存弁証法的方法は、仮名使用というキルケゴール特有の困難を回避するために取られたわけであるが、『苦悩の世界』の「論述において引用されたキルケゴールの文章は、後にキルケゴールの本音または解説として読まれることを意識しつつ書かれたものを含む日記の文章と、仮名の著者の名前で引用し、キルケゴールの言葉としないのでほしいと断っている仮名の著作の文章と、『講話』など本名で出版されたものの文章とが、まったく並列的にキルケゴールの思想の表明として扱われている個所が少なくない」と批判し、「「歴史的客観的な作業」を基礎とする「総合的視野」に

立つ本書の研究方法においては、これらの三種類の文書を対等に扱う論拠はどこにあるのか」、「総合」の手順と方法の中で、そのことが明らかにされるべきではないのか」（小川 1979: 156）と質している。

1979年は、小川が「人類の知的遺産」に『キルケゴール』¹⁷を、橋本が『逍遙する哲学者—キェルケゴール紀行—』¹⁸を相次いで出版した経緯もあり、新教出版社主催で二人の対論が実現し、「キルケゴールへの今日的視点」として雑誌に掲載された。橋本は、日本におけるキルケゴール像がドイツ語文献によって多分に思想化されて受け止められていること、この一面性を是正する意味で伝記的な内容の『逍遙する哲学者』を書いたこと、橋本自身の立場はこのような伝記的研究と『苦悩の世界』で行った思想研究が結ぶところにあるとする（小川—橋本 1979: 51）。ここで問題となる点はいかに「〔小川〕歴史的研究と思想的研究が、方法的にどこでかわるのか」（小川—橋本 1979: 52）になるが、橋本はツルストルプの「歴史的方法」は『苦悩の世界』で詳述された「全体としてのキルケゴールの思想を総合的に構成すること」であり、単なる「歴史的研究」でないと応ずる。橋本は「歴史的研究」とは「時代的・伝記的・精神的な背景を究明する客観的な作業」と「著作活動（仮名著作・建徳的講話・遺稿集）を全体的に構成し、個々の著作を全体の中で位置づけること、あるいは個々の著作で展開される単一の思想や概念が、全体の思想との関係とどのように関連するものであるかを究明すること」と「個々の著作に関して厳密な釈義的研究をすること」、これら三つの内容を含む総合的把握であることを強調する（小川—橋本 1979: 53）。反対に橋本からはテキストに対する「実存弁証法的な解釈」の具体的な扱いが小川に対して質される。小川は「キルケゴールの仮名の著作にはそれぞれの思想的可能性にしたがって、さまざまな角度でセットされた多面鏡のようなものであって、私たちはそれぞれの著作と主体的に対話することによって、問題を自分自身の実存に投影して、つき返される」という仕方で関わるとし、「背後に焦点を結ぶのは、さしあたっては本来のキルケゴール像でな

17 小川圭治『キルケゴール』（人類の知的遺産48）講談社、1979。

18 橋本淳『逍遙する哲学者 キェルケゴール紀行』新教出版社、1979。

なければならない」が、「同時に本来の自己とは何かと問いつめられる形での読者の実存でもある」という「実存弁証法的多面鏡」という解釈の方法であると説明している（小川－橋本 1979: 54）。方法論に関してはこの対論を通じて必ずしも両者が一致したとはいえないが、この結果は小川の方法論に関する新しい論文という形で現れる。対論の翌年に発表された「キルケゴール研究の方法について」である。

この論文で小川は、梶田との論争から橋本との論争にいたる問題点を整理・紹介して、自己のキルケゴール研究に、キルケゴールの「生活のデータに関する研究」「キルケゴールの思想形成にかかわる生涯の研究」「著作の実存弁証法的な位置づけと成立事情の解明」「実存弁証法による主体的解釈」、これら四つの階層の研究が総合的に進められるべきであると主張する（小川 1980: 16）。小川がこの方向の標準的な例としてマランツク（小川の表記は「マランチュク」）の研究を挙げ、その『キルケゴールにおける弁証法と実存』を詳細に分析している。そのような研究を通して、キルケゴールの思想に「統一性」（小川 1980: 3）もしくは「一貫性」（小川 1980: 26）があるものとして捉えようとする。たとえば、そのようなキルケゴールの総体を示す思想が「実存弁証法」（ディーム）、「弁証法的方法」（マランツク）である。キルケゴールの「人間」をまったく顧慮しないかのようなディームの発言には行き過ぎもあり、その点からも歴史的考察の意義を認め、「人間的考察」からはじめるマランツクに賛意を示している（小川 1980: 28-29）¹⁹。

先の小川－梶田論争においては、のちに小川も指摘するように、あたかも歴史的研究と主体的解釈が排他的に対立しあうかにみえる状況も生じた（小川 1980: 10）。しかし今回の論争においては、解釈における主体的契機の重要性は前提として確認されている（橋本 1976: 76、小川－橋本 1979: 52, 58）。むしろ問題になった点は、キルケゴールへの接近方法であり、総合的理解のための視座

19 小川にすでに梶田への応答への「付論」において、自分の研究方法が「ディームの立場そのまま」でなく、むしろ「マランチュクの立場に一番近い」ことを認めている（小川 1975: 124）。

である。橋本はツルストルプから出発し方法化された「歴史的方法」にたつ。この方法の進み方はキルケゴールのテキストの歴史性を重視して、「下から上へ」と総合する道筋をとる。これに対して小川はディームからマランツクへと方法を発展させ、「実存弁証法的多面鏡」の解釈を主張し、まず著作との主体的対話を重視して、「上から下へ」の総合を考えるとイえる。無論それぞれの総合は、歴史的な研究と主体的な解釈が相互に循環するから、「下から上へ」または「上から下へ」と一方向で為されるのではないが、視点の措き方にこのような対照がある点は確かであろう。

小川－梶田論争でのディームとヒルシュとの間の対立は、キルケゴール像を主体的に構成することによって歴史的キルケゴール像を無関心的なものにする立場（ディーム）と、歴史的なキルケゴール像へと執拗に迫る立場（ヒルシュ）であった。今回の論争では、小川がディームの見解が歴史的なキルケゴール像を無視しているかのような言い過ぎがあったこと、実際はディームも人間キルケゴールに「必要な限り」十分に配慮していたことを確認して、むしろマランツクの方法に従うと述べる。橋本は、マランツクの研究を認めつつも、その歴史的な探求の弱さを指摘して、むしろツルストルプの「歴史的方法」からマランツクを総合する方向をとっている。この意味で橋本－小川論争は、ツルストルプ－マランツクの対立という側面をもつ。ここでわれわれは早急に総括することなく、橋本と小川がそれぞれ依拠する二人の見解を確認しよう。

4. ツルストルプの「歴史的」方法とマランツクの方法

キルケゴール研究史におけるもっとも収穫の多い年は1967年と1968年であった。1967年、ツルストルプは『ヘーゲルに対するキルケゴールの関係』²⁰を、翌年、マランツクは『キルケゴールにおける弁証法と実存』²¹を相次いでそれぞれの主著として発表した。両者の研究は本作にとどまらず、大谷や橋本が推奨するデ

20 Niels Thulstrup, *Kierkegaards Forhold til Hegel og til den spekulative Idealisme indtil 1846*, Kbh: Gyldendal, 1967.

21 Gregor Malantschuk, *Dialektik og Eksistens hos Søren Kierkegaard*, Kbh: Hans Reitzels Forlag, 1968.

ンマークの研究らしくキルケゴールの著作にくわえて日誌遺稿を十分に考慮したものである。ツルストルプとマランツクの研究的方法論は、すでに1950年代にはそれぞれ確立されており、それは先に挙げた両者の主著、さらに以降の研究においても一貫している。そこでわれわれは初期の論文を参照してその方法論を素描し、両者の相違を確認しておきたい。

(1) ツルストルプの「歴史的方法」

ツルストルプはみずからの方法論を「歴史的方法」と呼び、これをキルケゴール研究文献に対する書評ならびに方法論そのものを主題とした論文で提示している。ツルストルプの方法論に一貫する見方はキルケゴールの著作が一つの「問題複合体」(problemkompleks) であるという主張である (Thulstrup 1955b: 370)。問題複合体は「歴史的な問題」「体系的問題」「批評のための問題」に区分される。ただし体系的といわれるのはキルケゴールの著作に関する積分的解釈であり、いわゆる体系的解釈は第三の区分にはいる。ここでツルストルプが強調する点は、著作を「細部から総体へ理解する」べきであって、「分析が総合に先行する」ことである (Thulstrup 1955b: 371)。なぜなら「キルケゴールのテキストが無数の糸でその歴史的な同時代に結びつけられている」からである。研究者は「彼の用語の選択、議論構成の方法、文章上の手本、その反对者、著作で論争を仕掛けた諸々の潮流・理論・傾向は同時代に、否定的であれ肯定的であれ、広範囲にわたって刻印を受けている」(Thulstrup 1955b: 375) ことをしっかりと把握すべきなのである。この論点はすでに橋本の主張で明らかであった。

ツルストルプはこの意味で歴史性を重視するわけであるが、この点についてさらに注目すべき発言をしている。「キルケゴールを解明する」ということは「当然の如く彼の人間 (Person) ではなく、彼が文章としてのこした作品、つまり書かれた言葉を想定している」(Thulstrup 1955a: 280)。いいかえれば「われわれにとってキルケゴールとは、多彩かつ多様な内容をもった包括的なテキスト群 (Textsammlung) である」という (Thulstrup 1955a: 281)。そこで「これらテキストを解明することが研究者の課題である」(Thulstrup 1955a: 280) ことに

なる。ツルストルプにおいては、歴史上のキルケゴールとテキストとが冷徹に分離されている。このツルストルプの立場は決して非難されるべきではなく、むしろ積極的に評価されるべきである。それは、梶田論文にみられたように人間キルケゴールとその思想を無反省に同一視することは議論を混乱させることであり、小川からの反論で指摘された難点をどうしても逃れ得ないからである。ツルストルプは、思想と思想家、彼の言葉に従えば、人間とテキストを分離し、そのことによってわれわれが本節の冒頭に確認した点を明らかにする。つまり、われわれが関心を抱くのは著作家キルケゴールであり、それ以外ではないこと、そして著作家キルケゴールは書かれたテキストの外にはないこと、さらにいえばテキストに現れた限りでのキルケゴールが、われわれにとって問題であることをツルストルプは確認しているのである。この点は、彼の方法がいわゆる歴史的方法とは異なり、キルケゴールへと、個人的＝心理的に深入りせず、テキストの成立にかかわる限りでそれに言及するという姿勢にもはっきり現れている。この点、橋本が引用した「ツルストルプの研究にはスピリットが欠ける」というN.H.セーの評言（小川－橋本 1979: 52）が思いおこされるが、それはツルストルプの方法からは当然の帰結であろう。

（2）ツルストルプにおける解釈学的立場

テキストとしてのキルケゴールを扱うツルストルプの方法は、聖書学における「歴史的批判的方法」に類似し、とくにルドルフ・ブルトマンの見解に近い。その研究態度は「解釈学の問題」で示されるが、この論文をもとにツルストルプは「いかにテキストを理解するか」について明らかにしている。

この論文でツルストルプは、ブルトマンの見解に依拠しつつ、アリストテレスによって指摘された解釈学的循環（「部分から全体へ、また全体から部分へと理解されねばならない。解釈は円環の中で動く」）と作品を「生の表出」と考えるデイルタイの解釈学を簡単に述べる。ブルトマンは、デイルタイ的な把握は作品を詩的ないし哲学的な表出ととらえる限りで一面的であると考えた、とツルストルプはいう。なぜなら「すべての理解はある一定の問題設定によって方

向付けられている」(ブルトマンの言葉では、ある一定の Woraufhin によって方向付けられている) からであり、「いかなる理解であれ、つねにテキストが答えるように読者が問いかける事柄についてのあるまったく規定的な先行理解に先導されている」からである (Thulstrup 1981: 13-14)。ディルタイ的な問題設定は解釈学の唯一の問題設定ではない。むしろ、ブルトマンによれば、理解とはわれわれがテキストを先行理解の下に、テキストの中で開示される人間存在の可能性を理解することである²²。

これに対して歴史主義はテキストを単に「資料」(kilder) として、過去のな何かを再構成する目的のためにあるものとして理解したとツルストルプはいう (Thulstrup 1981: 15)。歴史主義的発想には、解釈者はテキストにおいて何を問うているかとの反省が欠けている。つまり、理解が無前提的でないことを忘れている。歴史主義は無反省的であることによって、無関心性として把握された「客観性」を要求する。このとき主観は解釈において沈黙を守るべきものとされる。しかし、テキストの理解それ自身が関心を伴った先行理解に依存する以上、それは不可能である。ブルトマンに従ってツルストルプは、理解がむしろ反対に「テキストにアンガージュし、取り組み、読解したことに捉えられ、自分の知恵を理解するために適用する」ことであるという。つまり、解釈学的な客観性とは、主観の排除を意味するする歴史主義的な無関心性ではなく、「一貫した方法に従いながら」(konsekvent metodisk) 解釈を遂行することである (Thulstrup 1981: 17)。確かに個々の研究者には主観的な限界の中にあるものの、それはこうした解釈の客観性を損ねるのではなく、理解の条件である。読者は、しかしあらかじめ決められた結論をテキストから恣意的に引き出してはならない。読者の恣意を退けるために、方法上の一貫性が要求されるのである。かくしてブ

22 ブルトマン的な方向に触発されたキルケゴール研究については、W. アンツが言及されなければならない。ディームとアンツの立場を論評した小川によれば、アンツは先述のディームの立場をさらに「実存論的解釈学にまで徹底」しようとしたという (小川 1964: 55)。本論文の目的を逸脱するので、いずれがいつそう適切かという議論は割愛せねばならないが、解釈における「循環の方法」(小川 1964: 54) が主体的なテキストへの取り組みという方法論的態度と不可分であることは確認しておいて良いだろう。

ルトマンは、聖書のテキストの釈義における客観性を可能とする方法論的前提を「歴史的－批判的研究」を要求する。

ツルストルプは、この点をさらに分析して次のように論ずる。読者は、素朴にテキストに向かい、「テキストの見解は何であるのか、どのような意味で私にかかわるのか」を問う。続いて研究の段階が要求され、それは「文献学的－歴史的的部分研究」「体系的解釈」「批判的評価」との階梯をすすむ（Thulstrup 1981: 18）。ツルストルプは、ブルトマンが単に学的な研究ばかりでなく、何よりもまず一般人間的な次元で先行理解の問題を捉えていることを指摘する。ブルトマンにとっては先行理解の問題は人間において「原理的」である。この点でツルストルプは、ハイデガー的なブルトマンに疑念をあらわす。むしろツルストルプは「先行理解」の問題を学的な領域の事柄としても把握するかのような態度をとっている。ツルストルプの方法論的な自覚は、ブルトマンに親近性をもつ。つまり解釈は先行理解に支えられるという点である。しかしながら学的・歴史的に読む場合、そのような先行理解に立つ限り方法的に一貫すべきであり、この一貫性によって理解は読者の恣意とはならないのである（Thulstrup 1981: 18-19）。

ツルストルプの方法論的自覚にもかかわらず、彼の研究がいわゆる歴史的な研究と誤解されるのはなぜであろうか。テキストの読解から、主体的アンガージュマンと客観的研究が生ずるとツルストルプは述べる。しかし主体的と言われる部分はツルストルプの研究にはっきり現れない。それは「決してそれを軽視する」からではなく、「語り得ない」からである（Thulstrup 1981: 273）。しかし客観的な「研究」については語りうる。そしてその成果がキルケゴールの諸版となり、著作・論文となるとツルストルプは考えた。客観的研究は「歴史的」「体系的」「批判的」という階梯をへる。この階梯は、単に三つの研究の方向ではなく、批判的研究は体系的解釈に、体系的解釈は歴史的釈義に依存するのである。まず「歴史的」な問いが先行する（Thulstrup 1981: 276、また Thulstrup 1955b: 373-374を見よ）。ここでの歴史研究は、先に述べたキルケゴールの個々の著作の歴史的諸前提の解明であり、体系的解釈は歴史的釈義に基づいてキルケゴール

の思想世界の全体的構成であり、批判的研究は体系的積義にもとづいてキルケゴールの思想的意義を問うことである。この観点からツルストルプはいわゆる体系的研究を批判する。それは歴史的方法の成果、つまりキルケゴールのテキストの歴史的諸前提をわずかにしか顧慮しないか、全く顧慮しないことによって、解釈者の独断的な立場を「主観的に！」読み込むからである。結果いわゆる体系的研究は互いに相反する解釈に達し、そのキルケゴール像があたかも対立するかのように見える。しかしこの対立はみかけのものにすぎない。なぜならこれら体系的解釈者は、テキストの積義に無反省であるがゆえに対立するのであり、その対立はもともと研究者が予め持っていた思想的立場、ないしはそこから派生するキルケゴール像の対立にすぎないからである。ツルストルプは、いわゆる体系的解釈の不毛をこのように批判し、みずからはテキストの積義、それにもとづいたキルケゴールの思想世界の構成（本来の体系的解釈）にみずからの仕事を制限した。しかしその詳細さ、広範さ、容赦のなさは他に比類ないものであり、この精力的なキルケゴールのテキストの関わりにこそツルストルプの主体的なアンガージュマンがあるというべきだろう。

(3) マランツクの方法

ツルストルプの方法は、ヒルシュの方法に類似するにも拘らずその方法論的自覚においては、むしろ解釈学的であった。その結果自覚的に「歴史的研究」に専念した。このツルストルプが批判するのは、このような解釈学的な反省を欠いたいわゆる体系的な解釈である。われわれがこれから取り上げようとするマランツクもいわゆる体系的解釈にツルストルプは数え上げている。なぜマランツクの方法が批判されるべきかを論ずる前に、まずマランツクの方法が素描されねばならない。

マランツクは、キルケゴールをエドワルド・ガイスマーに学び、論文「キルケゴールにおける肉中の刺」²³で注目された。マランツクの主著は『キルケゴー

23 Gregor Malantschuk, Pælen i Kødets (1940) この論文は以下に採録されている。*Frihed og Eksistens: Studier i Søren Kierkegaards tænknin*, ed. by Niels Jørgen Cappelørn

ルにおける弁証法と実存』(1969年)であるが、その研究態度は初期に書かれた『キルケゴールの著作活動入門』(1952年)²⁴ですでに明らかにされている。そのキルケゴールの解釈枠は「実存の三段階説」であり、のちに『弁証法と実存』で解明される著作活動全体の弁証法的構成である。基本的にマランツクはガイスマーの方向を継承していると考えてよい。

「三段階説」と「弁証法的構成」は、決して別々のものではない。マランツクによれば、キルケゴールは著作活動全体に対して「一つのプラン」をもち、このプランに従って「著作活動は段階的に前進するように築き上げられた」。無論マランツクも注意するように、キルケゴール自身がこれを初めから完全に見通していたわけではない。しかし最後にはキルケゴールにとって「摂理」(Styrelsen)として理解したという (Malantschuk 1979: 7)。マランツクの著作活動全体に対する洞察は1851年にキルケゴールが刊行した『わが著作活動について』と死後に兄ペーター・クリスチャンが刊行した『わが著作活動の視点』(1859)に導かれていると考えられる。「著作活動」を実質的に「前進的」にするのが「三段階説」である。この意味で「[段階の]理論はキルケゴールの制作全体の基礎にある」とマランツクは主張する (Malantschuk 1979: 17)。この段階の理論を基礎にキルケゴールの著作活動全体を解明せんとした著作が『著作活動入門』である。

段階の理論は「ただ一つのはっきりとした前提」つまり「人間がまったくこととなった二つの質の総合である」との前提に基づいている。マランツクによれば、キルケゴールはこの洞察をキリスト教から得ている。人間を構成する総合はさまざまに表現されるが、それは結局「時間と永遠との総合」にほかならない (Malantschuk 1979: 17)。段階の理論は、この洞察に基づいて人間のあらゆる可能性を描く。人間は総合としてその総合を構成する諸契機との関係からさまざまな可能性を生きたが、それら諸可能性は、諸契機の、すなわち時間と永遠との関係の在り方にしたがって描くことができるのである。総合の契機は、

and Poul Müller, Kbh: C. A. Reitzels Boghandel, 1980, pp. 11-18.

24 本文の引用には以下のリプリント版を用いた。Gregor Malantschuk, *Indførelse i Søren Kierkegaards forfatterskab*, Kbh: C. A. Reitzels Forlag, 1979.

しかし正しい関係において総合されねばならない。それゆえに人間のあらゆる諸可能性は、諸契機の関係の在り方によって整序され、それら諸関係は正しい総合へと前進的に位置付けられる。これが「段階の理論」である。マランツクは、キルケゴールが著作活動をこの段階の理論に基づいて構想し、彼の著作活動には読者を正しい総合へともたらす機能があると考えた。それゆえマランツクに従えば、研究者はこの全体的な構成を把握し、承認すべきなのである。

マランツクの著作活動の総体的把握という方法論的態度は一貫しており、それが『弁証法と実存』という著作活動の総体的構造を解明する研究に結実する。本書でマランツクはキルケゴールの著作が「意図的に難しく」されていることを確認し、この困難がキルケゴール自身の一貫した方法に支えられていることを指摘する (Malantschuk 1968: 9)。この方法こそが「弁証法的方法」である。この方法はあまりに巧妙であるので、キルケゴール自身解明の鍵を後世にのこす必要を感じたという。その鍵となる著作こそ先述の自著解説である。ここで与えられた見通しは『あれかこれか』から『金曜日の聖餐式における二つの講話』にまで適用されねばならない。マランツクによれば、キルケゴールは「個々の作品を相互関係においてあるべき場所に置く《総体的構想》(Total-Anlæg)から全てが理解される」ように著作活動を構成した (Malantschuk 1968: 10、また Malantschuk 1979: 7を見よ)。マランツクが「全著作活動の弁証法的連関」と呼ぶものである。これこそが「著作活動を理解するための指導原理」(Malantschuk 1968: 11) ということができる。「著作家の作品、その真理と傾向を検査することが問題である際、キルケゴール自身の勧める手順を適用することが目的」に相応しく、「その手順とはこの著作家が企てた思考操作と弁証法的運動を模倣する」ことに他ならない (Malantschuk 1968: 12)。著作活動を「総体的構想」として理解するマランツクの方法は、キルケゴールが著作活動を意図的に構成したのだとの証言に基づいている。さらにこの方法がキルケゴール自身の方法であるのだから、彼の著作活動の解明に適った方法であるとの主張でもある。

著作家自身の証言に従って彼の著作を理解するとの、マランツクの見解は大変に納得しやすい。しかしわかりやすさが方法の正当性を保証するわけではな

い。マランツク自身が指摘するように、著作活動を総体的構想として機能せしめる弁証法的方法をキルケゴールがその当初から自覚していたわけではない。この点は『入門』でも『弁証法と実存』でも弁明されているが、それは必ずしも説得的ではない。マランツクが傍証として引用するキルケゴールの証言は後年の日誌からの言葉であり、それは著作活動が初めから意図的に仕組まれていたとの証拠とはならない。マランツクは、キルケゴールは著作活動のそのような仕組みを「摂理」として自覚したと主張するが、これは何の証明にはならない。マランツクは『弁証法と実存』の前半を1833年から43年までの日誌記述の考察にあて、これらの資料からキルケゴールがいかに弁証法的方法ならびにそれを構成する前提・概念が獲得されたかを解明する。しかしこの時点でキルケゴールが弁証法的方法を意図的に著作活動に適用し始めたことを証拠立てたとは言えない。むしろ意図せずしてキルケゴールはそのような方法を採用し、のちに著作活動を反省して自覚したというべきであり、それが「摂理」という意味であろう。むしろ反対に「自分について制作の構想全体に当初から見通しがあったと主張すべきでない」、「私は仕事をしながら教育され、成長をとげ、以前に比べてますますキリスト教的なものに堅くつながれていったというべきである」(Pap. IX A 218 / SKS 21, 49: NB 6: 66) とキルケゴール自身述べている。キルケゴールの自著解説といえども、この場合著作活動全体についてのひとつの解釈であり、それが特権的地位をうることはない。キルケゴールさえもこの点ではみずからの著作の読者なのである。

キルケゴールの著作活動を総体的構想としてみるためには、著作活動を鳥瞰しうる視点が確保されていなければならない。この視点からは著作活動全てがあらわになっている。しかしわれわれが理解しようとするテキストは全体としてみれば細部がそれに応じて不明瞭となり、その細部を明瞭にしようとするれば全体理解が変更されねばならない。先述のようにここには古典的な解釈学的循環がある。それゆえ一般的にテキストの理解はつねに進展する。そこではいかなる理解も暫定的でしかない。これをわれわれの問題において考えるならば、キルケゴールのテキストを理解するための特権的な視点は確保し得ないという

ことである。そのような視点が確保できるとすれば、すべてが白日のもとにさらされているのであり、それはまさしく「摂理」といった神の視点である。ツルストルプがマランツクの『入門』を評して、キルケゴールを「前からでも後からでもどこから読み始めてもよい一冊の大きな本の如くに読んでいる」と批判するのはこの点である（Thulstrup 1955c: 316）。

マランツクは、この難点をキルケゴールの自己理解を媒介することによって回避する。つまりマランツクはキルケゴールの自身の視点を自己の視点することによって著作活動の総体を把握しようとする。しかしすでにみたようにキルケゴールの視点もひとつの解釈にすぎないとすれば、マランツクの方法はこの困難を免れてはいない。『わが著作活動について』と『視点』でのキルケゴールの自著解説を疑うという態度がマランツクにはそもそも欠けている。マランツクは自著解説にキルケゴールの本来的な姿を読み取っているのであり、「本来のキルケゴール」が彼にとっての尺度なのである。この点でマランツクは、テキストに対してあまりにもナイーブな態度をとっている。テキストからは「本来のキルケゴール」、つまり著作活動を行った人間キルケゴール、史的キルケゴールが表出している、というのがマランツクの前提である。

『入門』をマランツクが著したとき、ツルストルプは本書を、不当に「純粹に体系的」「図式的」である、と評した。それは「キルケゴールの内外にわたる私的な生活にも文学的・哲学的・神学的な諸前提」への顧慮が欠けているからであった（Thulstrup 1981: 275）。この批判は『弁証法と実存』には必ずしもあたらない。「弁証法的方法」が生成されてゆく経過をマランツクは歴史的に丹念に描写するからである。しかしそれでもこの研究が不当に「体系的・図式的」なものである点にかわりはないであろう。自著解説が史的キルケゴールの証言であるとのマランツクの前提を共有しなければ、「段階の理論」に換えて「弁証法的方法」という視点からキルケゴールの思想を整理したと評されても致し方ないからである。

マランツクの方法は、キルケゴールの著作活動における「弁証法的方法」を鮮やかな手際で描き出した。しかし研究態度は決して「弁証法的」ではないと

いうべきである。すくなくとも「解釈学的」ではない。

ツルストルプとマランツクの方法をそれぞれ検討して次の点が明らかとなった。二人の研究は（大谷と橋本が推奨する）デンマーク語資料と文献にもとづいた研究であり、日誌以降の使用においても申し分ない研究である。しかし、それら資料への姿勢は対立的であった。まずツルストルプの「歴史的方法」はいわゆる「歴史的研究」と重なる点が多いにせよ、方法論的自覚においてキルケゴールの著作をテキストと見るか、または資料と見るかという点で差異があり、いわば前提において解釈学的な二十世紀と歴史主義的な十九世紀といった差異がある点である。これはツルストルプが自分の「歴史的方法」と「歴史化する方法」とを区別するように要請する点からも傍証される（Thulstrup 1955c: 312）。ツルストルプの立場は「解釈学的」なのである。一方マランツクの方法は「本来のキルケゴール」を前提とする点で、その方法論的態度はガイスマーの立場に近く、この点でテキストに対する素朴な姿勢を共有する。一般的理解とは反対に、方法論的姿勢から見ると、ツルストルプが解釈学的である点でむしろディームに近く、マランツクがその素朴さでヒルシュに近いのである。テキストに対するマランツクの素朴な姿勢は批判されるべきである。しかしながら『弁証法と実存』において明らかにされた成果までが不当に貶められてはならない。マランツクは確かにキルケゴールの著作にある弁証法的構成を確かに解明したのである。それはただマランツクの方法によってではなく、そのたぐいまれな洞察力の結果であったというべきである。

ツルストルプの方法論的態度は明確かつ一貫しており、その実践においても、一連の資料公刊事業または彼の詳細な、あまりにも詳細な積義的な研究をみるかぎり批判の余地はないと思われる。彼は「歴史的方法」の手続きを明らかにし、それを遂行した。しかしながら、ツルストルプは「歴史的積義的研究」「体系的な研究」「批判的研究」という研究の進むべき三つの階梯を設定しながら十分に、この行程を為しおせてたといえるであろうか。「歴史的積義的研究」はともかく、「体系的な研究」としては部分的に『キルケゴールのヘーゲルに対する関係』や『断

片』ならびに『後書』の解説がそれに数え上げることができるにすぎない。『キルケゴールのヘーゲルに対する関係』（Thulstrup 1967）にも体系的、批判的部分が期待されたが²⁵、それは果たされなかった。「歴史的・積義的研究」におけるツルストルプの手続きは明瞭であるが、「体系的」「批判的」研究にいかん積分されるかは、明瞭に実例を持って示されなかった。ツルストルプの「歴史的方法」にそのまま従えない点である。

おわりに

日本におけるキルケゴール研究方法に関する論争を、デンマークにおける研究方法をめぐる議論を回顧しながら検討する際に明らかにになった問題は次の点である。

第一に、小川－梶田論争にみられたように、著者キルケゴールと作品の関係をどのように考えるかである。歴史的研究は、作品を著者の現れと考えることによって人間キルケゴールを探究する。しかし仮名著作をふくむ特有の著作活動を展開しキルケゴールでは、作品と人間キルケゴールの懸隔をうめ得ないという原理的な困難を内包している。一方、実存弁証法的解釈は、思想と思想家を分離し、テキストに現れる限りでの思想に関わろうとする。この思想への関係の在り方が「実存弁証法」なのであるが、この弁証法における成果が読者にその人の実存を発見させることでしかないとなると、「キルケゴール」を研究すると云う場合の固有性はどこに見いだしたら良いかという疑問が残る。また、「実存弁証法」といった方法や思想がその固有性だとしても、これをどこから確定的に、本来のキルケゴールとして得たかがまた問われる。

第二に橋本－小川論争では、人間キルケゴールへの関心が重要なのではなく、キルケゴールのテキストが関心の中心であることがすでにあきらかとなっている。問題は著作への接近方法となる。橋本＝ツルストルプの「歴史的方法」は著作

25 N. ツルストルプ『キルケゴールのヘーゲルへの関係』（大谷長他訳、東方出版、1980）所載の「日本語訳原著者序言」を参照。

の歴史的諸前提をあきらかにする著作の釈義という行程をたどって個々の部分から著作活動全体へと総合することによって「正しい」理解へと達しようとする。これに対して小川は「実存的多面鏡」においてキルケゴールと対話関係にはいることが必要であり、キルケゴールとの対話が同時に自己の発見であるという。ここでは小川－榊田論争で「実存弁証法的研究方法」で不明瞭であった研究の対象が対話関係に入るべき「キルケゴール」思想の総体という形で設定される。そこで今度は対話すべき総体を同定するために、マランツクに接近し、キルケゴールとその思想に接近するための歴史的考察の意義が回復される。

また、ツルストルプの方法の要点は、無造作な体系的解釈を排して「正しい」キルケゴールの全体的解釈を主張することにある。しかし個々の釈義がいかに全体的なキルケゴール解釈へと積分されるかがはっきりしていない点に難点がある。たとえば小川が橋本を批判したように、仮名著作と実名著作、日誌遺稿がまったく同列に扱うことが本当にできるのかという点に必ずしも答えていない。素朴な（ツルストルプとは異なり解釈学的反省を欠く）歴史的アプローチは、この点で作品を直截に史的著者の現れと考えることによって答えるだろう。ツルストルプは著者と作品をいったん分離しテキストを扱うというが、仮名著作と実名著作及び日誌遺稿をふくむ諸テキストの一体性はどのように保ち得るのかが説明されていない。性急に著者キルケゴールにこれを求めれば、テキストは単に史的キルケゴールの表出に逆戻りし、「歴史的方法」は素朴な歴史的研究と区別できなくなってしまう。実存弁証法的立場でも、対話者としての「キルケゴール」を立てることによって統体を見いだすというのであれば、対立するかのように見える実存弁証法的研究方法といわゆる歴史的研究が同一の前提に、諸テキストの統体を支えるのは史的キルケゴールである点に立つことになる。両者の相違は、実存弁証法的研究が著作を通じて間接的にそれに触れると考え、著作に仕組まれた方法においてだけ、本来の「キルケゴール」に触れうののに対し、いわゆる歴史的研究が直截にそれに触れると考えるところにしかない。「キルケゴール」という呼称をもって何を指し、どのように一体性もしくは総体性を見いだし、これに接近するのか。

新版全集が刊行された今日のキルケゴール研究の状況を顧みて、これらの論争の成果をどのように受けとめたら良いであろうか。冒頭にも述べたように、新版全集にいたるまでキルケゴール研究において『著作全集』と『日誌遺稿集』が用いられてきた。しかし、日誌遺稿の意義についてはこれまでの回顧が明らかにするように次第に議論が深められてきたといえる。それはキルケゴールの受容の歴史からみて致し方ない事情があった。仮名を使用したり、さらにこれらに自著解説をくわえたりする独特のキルケゴールの著作活動は、死後遺された文書類、日誌遺稿への関心とならざるをえなかった。これは翻ってその著作・テキストを理解するための日誌遺稿が解釈のための補助的資料として注目されたということである。本研究において日本の論者によって呼称は異なり、「歴史的研究」、「歴史的方法」との違いはあっても日誌遺稿が歴史的な考察の基礎として言及されてきたことに反照している（無論、論者がただちに日誌遺稿を低く評価しているという意味ではない）。

このような受容史上の経緯はあるものの、新版全集においては従来、私たちがキルケゴールの著作と呼んでいた文書（「刊行著作部門」）と日誌遺稿と呼んでいた文書（「未刊行著作部門」と「日誌遺稿部門」）が総体的な文書として提供される。部門分けがその文書に特徴があることを示しているが、「キルケゴールが書いた文書」という意味ではそれぞれの文書が等しく評価されるべきことを示唆している。新版全集の刊行をもって、鈴木のように日誌遺稿（鈴木は「日記」という呼称を用いる）の研究上の意義を再発見すべきであるとの主張も見られるようになった²⁶。ツルストルプやマランツクが実践したように、著作とともに日誌遺稿に十分に顧慮しながら、キルケゴールの読解は遂行されるなければならない。この論点は、大谷や橋本の主張でもあった。ただ注意しなければ

26 鈴木祐丞「キルケゴールの思想の研究において、日記を資料として活用することの必要性について」『哲学・思想論叢』(34), 2016, 1-14頁。鈴木はさらに立ちいって「日記」独自の思想を探る可能性に言及している（本文4頁、12頁）。鈴木による新版全集の評価については以下を参照。鈴木 祐丞「キルケゴールの新版原典全集(SKS)の特徴と意義について」『名古屋商科大学論集』58(2), 2014, 167-174頁。筆者は、鈴木のスべての主張に同意するわけではないが、著作と「日記」を総体として理解すべきとの見解に異論はない。

ならないのは、日誌遺稿を顧慮するか否かであるよりも、著作とともに日誌遺稿がどのように読まれるかである。新版全集により、日誌遺稿のアクセスの困難（近年は古書でも稀観書となっており、また英訳は部分訳であった）や本文批評上の困難が解消されたとはいえ、原理上の問題はのこるからである。従来は、著作と日誌遺稿をふくむ歴史的な基礎資料との関係が、著作・日誌遺稿をふくむ文書との関係という構図に推移したにすぎないからである。言い換えれば、私たちが「キルケゴール」と呼んだテキストが拡張されたということでもある。著作をどう理解するかという問題が、著作と日誌を含む文書をどう理解するか、という問題に替えて過去の方法論争における焦点を再考することが必要である。この現実を平らかに見たとき、あらためて「キルケゴール」という呼称をもって何を指しているのか、何を読もうとしているのか、そして、その読解に必要とされる基礎的な研究資料に基づいて、どのように「総合」されるべきかを語る方法論が明らかにされなければならない。

「キルケゴール」とは何かをあらためて問うこと、それに著作・日誌遺稿その他の文書とあわせて、いかに接近するか、これを提示することがキルケゴール研究方法における課題である。これを論ずるにはすでに紙幅がつきている。この課題については稿をあらためて述べることにしたい。

参考文献（ただし、注で紹介したキルケゴールの著作・翻訳を除く）

【本文等で引証した文献】（引用文中の傍点・ゴシック体は、できる限り原文にしたがった。）

大谷愛人（1966）.『キルケゴール青年時代の研究』勁草書房.

小川圭治（1964）.「キルケゴール解釈の問題」『東京女子大學論集』14（2）, 41-63頁.
https://twcu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=24706&item_no=1&page_id=13&block_id=28（2020年1月15日閲覧）

-----.（1975）.「第二部 第一章 キルケゴール解釈の問題」「付論 梶田啓三郎氏の批判について」『主体と超越—キルケゴールからバルトへ—』創文社, 89-118頁, 119-124頁.

-----.（1979）.「〔書評〕橋本淳著『キルケゴールにおける「苦悩」の世界』（未来社、一九七六年、四七四頁）」『日本の神学』（基督教学会）第18巻, 52-57頁.

-----.（1980）.「キルケゴール研究方法について」『基督教学研究』（東京女子大学）第3号, 1-33頁.

小川圭治・橋本淳（1979）.「（対談）キルケゴールへの今日的視点」『福音と世界』11月号, 新教出版社, 1979, 50-59頁.

橋本淳（1976）.『キルケゴールにおける「苦悩」の世界』未来社.

鈴木祐丞（2016）.「キルケゴールの思想の研究において、日記を資料として活用することの必要性について」『哲学・思想論叢』（34）, 2016, 1-14頁.

https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=39909&item_no=1&page_id=13&block_id=83（2020年1月15日閲覧）

梶田啓三郎（1965）.「キルケゴール研究の意義と方法—ひとつの弁明—」『哲学誌』（東京都立大学）第7号, 1-17頁.

Malantschuk, Gregor（1968）*Dialektik og Eksistens hos Søren Kierkegaard*, Kbh:

Hans Reitzels Forlag.

-----, (1979) *Indførelse i Søren Kierkegaards Forfatterskab*, Kbh: C. A. Reitzels Forlag.

Thulstrup, Niels (1955a) Die historische Methode in der Kierkegaard-Forschung durch ein Beispiel beleuchtet, *Orbis Litterarum* X, pp. 250-296.

-----, (1955b) Problemkomplekset Kierkegaard, *Det Danske Magasin*, redigeret af Terkel M. Terkelsen, Nr. 6, 3. Aargang, pp. 369-380.

-----, (1955c) Ziele und Methoden der neuesten Kierkegaard-Forschung mit besonderer Berücksichtigung der skandinavischen, *Orbis Litterarum* X, pp. 303-318.

-----, (1967) *Kierkegaards Forhold til Hegel og til den spekulative Idealisme indtil 1846*, Kbh: Gyldendal. (N. トウルストルプ『キェルケゴールのヘーゲルへの関係』大谷長他訳、東方出版、1980)

-----, (1981) Hvorledes forstår man en tekst; Risikoen: at læse Kierkegaard, i *Aksept og protest I: artikler i udvalg*, Kbh: C. A. Reitzels Forlag, pp. 11-19; pp. 273-277.

【本文等で言及した文献】

小川圭治 (1979) 『キェルケゴール』 (人類の知的遺産48) 講談社.

橋本淳 (1979) 『逍遙する哲学者 キェルケゴール紀行』新教出版社.

鈴木祐丞 (2014). 「キェルケゴールの新版原典全集 (SKS) の特徴と意義について」『名古屋商科大学論集』58 (2), 167-174頁.

https://www.nucba.ac.jp/themes/s_cic@cic@nucba/pdf/njeis582/08suzuki.pdf (2020年1月15日閲覧)

Diem, Hermann (1928) "Methode der Kierkegaard-Forschung," *Zwischen den Zeiten*, vol. 6, pp. 140-71.

-----, (1929) *Philosophie und Christentum bei Søren Kierkegaard*, Munich: Kaiser Verlag.

-----, (1950) *Die Existenzdialektik von Søren Kierkegaard*, Zollikon-Zürich: Evangelischer Verlag.

Geismar, Eduard (1923-24). "Das ethische Stadium bei Søren Kierkegaard," *Zeitschrift für Systematische Theologie*, vol. 1, pp. 227-300.

-----, (1926-1928). *Søren Kierkegaard: hans Livsudvikling og Forfattervirksomhed*, Kbh: Gad.

Hirsch, Emanuel (1930-1933). *Kierkegaard-Studien*, Bd. I-II. Gütersloh (repr. Vaduz: Topos-Verlag 1978).

Malantschuk, Gregor (1980). Pælen i Kødet, i *Frihed og Eksistens: Studier i Søren Kierkegaards tænkning*, udgivet af Niels Jørgen Cappelørn og Poul Müller, Kbh: C. A. Reitzels Boghandel, pp. 11-18.